

浅川扇状地遺跡群

桐原牧野遺跡（3）

大規模通所介護（デイサービス）施設新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021年3月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第159集として刊行いたします本書は、大規模通所介護施設新築工事に伴って実施した、浅川扇状地遺跡群に属する榎原牧野遺跡の調査報告書であります。

発掘調査では、古墳時代から平安時代の住居跡や井戸跡等を検出したほか、多くの土器が出土しました。

この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財に対する深いご理解のもと、この調査にご協力いただいた事業者並びに地域の皆様、また発掘調査に携わっていただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和3年3月

長野市教育委員会
教育長 近藤 守

例 言

- 1 本書は、大規模通所介護（デイサービス）施設新築工事に伴い、記録保存を目的として令和元年度に実施した埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査の実施については、長野電鉄株式会社からの委託を受け、長野市教育委員会（担当：埋蔵文化財センター）の直轄事業として実施した。
- 3 調査地は長野市桐原一丁目746番1外に位置する。
- 4 開発区域は4,496.39㎡で、このうち発掘調査対象面積829㎡、実質調査面積は645㎡である。
- 5 発掘調査は、令和元年6月17日から8月22日まで、67日間実施した。

凡 例

- 1 遺構の略記号は以下の通りである。

竪穴住居跡—SB、掘立柱建物跡—ST、溝跡—SD、土坑—SK、井戸跡—SE、性格不明遺構—SX

- 2 遺構番号は、A区・B区・C区の調査区それぞれで番号を付けた。本文中では遺構番号の前に調査区の番号を付け記載している。（例：A-SB1はA区の1号竪穴住居跡の意）
- 3 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅱ系の座標値と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所に委託した。
- 4 遺構図は、調査区全体図（1：500）と、個別図（1：80）にて示し、このほか微細図などについては、適宜縮尺を示した。遺構図中のスクリーントーンは焼土面を、破線部は炭化物面、および硬化面範囲を示す。
- 5 土器は洗浄作業後に分類・接合を行い、全形および残存部位にておおそ1/4以上あるものを選別したが、特筆されるものについてはこれにかぎらない。遺物図版については土器を1：4にて示した。

・断面白ぬきは弥生土器・土師器を、黒塗りは須恵器を示す。

・スクリーントーンは、外面及び内面：赤色が赤色塗彩を、黒色が内黒処理を示す。

断面：灰釉陶器・白磁を示す。

- 6 表2土器・土製品観察表の記載のうち、残存部については「部位」は全体のうち残存する部分を示し、「量」では、部位で示した部分の内の残存量を示す。
- 7 遺物写真（土器）の番号は、実測図番号と対応する。
- 8 本調査の略号は「AKMK」とした。
- 9 調査によって得られた出土遺物および諸記録は、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター所管）にて保管している。

目次

序

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 調査経緯	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	3
3 調査体制	5
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	6
1 遺跡の立地	6
2 周辺の遺跡	6
第Ⅲ章 調査成果	8
1 調査概要	8
2 遺構	17
3 遺物	33
第Ⅳ章 まとめ	40

報告書抄録

奥付

挿図目次

図1 調査区位置図	1	図12 B-SB2 実測図	22
図2 調査地位置図	2	図13 A-焼土塊実測図	24
図3 調査地周辺遺跡位置図	7	図14 B区北東、A区中央部分実測図	25
図4 調査区全体図	9	図15 B-SE1・2 実測図	27
図5 A区全体図	10	図16 A-SK10・12・26・27	28
図6 B区全体図	11	図17 B-ST1 実測図	29
図7 A-SB1 実測図	17	図18 A-SX1 実測図	30
図8 A-SB3 実測図	18	図19 A-SX1 調査区北壁断面図	31
図9 B-SB1 実測図	19	図20 土器実測図1	34
図10 B-SB1 カマド土器・石材 検出状況実測図	20	図21 土器実測図2	35
図11 B区南西側遺構群実測図	22	図22 土器実測図3	36

表目次

表1 遺構観察表	15	表2 土器・土製品観察表	36
----------	----	--------------	----

第I章 調査経緯

1 調査に至る経緯

調査地は、長野市街地の北東部に位置する吉田地区桐原に所在する。長野電鉄桐原駅に近い住宅地で、古くから宅地化が著しい場所であったが、近年では残地となっていた畑地の宅地化もいっそう進み、さらに都市計画道路の高田若槻線の延線建設が行われるなど、利便性がより高くなっている地域である。

このような情勢の中で、平成30年10月に大規模ディサービス施設の建設計画が浮上した。該当地は、隣接地において平成26年に宅地造成に伴う発掘調査が行われていたことから、保護協議の初期段階から記録保存を目的とした発掘調査の実施が必要な場所として認識されていた。10月2日付で文化財保護法第93条の規定に基づく届出を受理し、これに対して長野市教育委員会は同月5日付で「発掘調査」保護措置の指示を行った。以後保護協議を経て、令和元年6月4日付で「発掘調査依頼書」および「土地所有者の承諾書」の提出を受け、発掘調査を行うこととなったのである。

発掘調査は、開発区域4,496.39㎡のうち、開発道路（A区）、建物地下ピット部分（B区）及び転回広場（C区）の約829㎡を対象とした。

発掘調査の現場作業は、6月17日から8月22日まで67日間行った。調査終了後は、埋蔵文化財センターにて出土した土器の洗浄・復元、写真・図面等の諸記録の整理を行い、令和2年度に報告書の作成を目的とした整理作業を行い、令和3年3月に本書を刊行し、全ての保護措置が完了した。

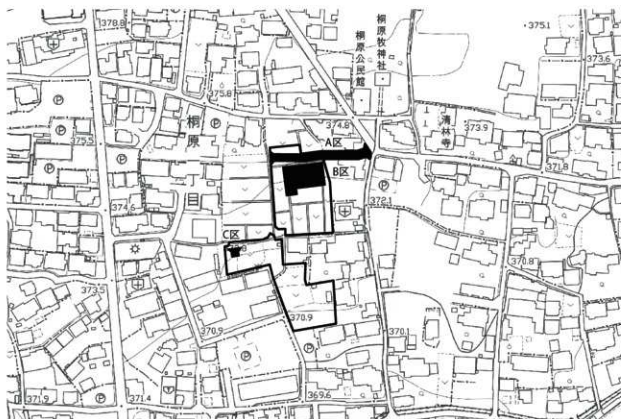


図1 調査区位置図（1：2,500）



調査地周辺航空写真（上が北）



図2 調査地位置図（1：10,000、黒丸が調査地）

2 調査経過

- 6月17日(月) A区重機による表土除去作業開始。
調査区東側から行う。
- 18日(火) 本日より作業員参加。A区の検出作業とB区の重機表土除去作業。
- 19日(水) A・B区検出作業。
- 21日(金) B区の検出を一部行うが、A区が終了するまで一旦掘削作業を中断。
- 25日(火) A区、昨日までの雨で調査区全体に水が溜ったことから排水、検出作業。
- 26日(水) 調査区東側土坑とSB1の掘り下げ。
- 27日(木) 調査区東側と中央部分のトレンチAの掘り下げ。
- 28日(金) 市立長野高校体験学習、遺跡説明とB区の検出作業を行う。A区遺構検出と掘り下げ、トレンチAで土器が多い。
- 7月1日(月) 櫻ヶ岡中学校職場体験。調査区東側遺構をほぼ検出する。
- 2日(火) 櫻ヶ岡中学校職場体験。調査区東側の清掃、遺構個別と全景写真の撮影。
- 3日(水) トレンチAを遺構(SX1)として掘り下げる。調査区西側の検出に入る。
- 4日(木) 雨のため、午後からA・B区の排水作業を行う。
- 5日(金) A区排水作業と落ちた土の除去作業。午後からSX1より東側の測量。
- 8日(月) A区SX1から西側とB区の排水作業。SX1上面土器を実測後取り上げる。西側焼土下から住居を検出。
- 9日(火) SX1下面の土器とレキ石列を検出。西側SB3壁面で炭化材を確認する。
- 10日(水) SB3掘り下げ、西側トレンチでの下面確認作業。B区午後から排水作業。
- 11日(木) A区西側・B区排水後、SB3写真撮影。B区検出作業。
- 12日(金) B区の遺構掘削作業に入る。



A区重機表土除去



作業風景(A区)



市立長野高校体験学習



櫻ヶ岡中学校職場体験

- 7月16日(火) A・B区排水を行い、B区検出作業。
 17日(水) A区空撮に備え雨の影響による泥等の除去作業。B区検出。
 18日(木) A区排水作業後、空撮と測量を行う。
 B区検出と遺構の掘り下げ。
 19日(金) B区検出。A区、午後から測量図結線。
 SX1の土器を取り上げ、A区の調査を終了する。(A区工事引き渡し)
 22日(月) 排水作業と並行して、調査区西側から検出作業。
 23日(火) 東側土坑・溝の掘り下げ、南西側はグリッドを設定して検出を行う。
 24日(水) 排水作業後に遺構掘り下げ。SB1、SD1と周辺の検出を合わせて行う。
 25日(木) 更北中学校職場体験。SB1カマド、南西で焼土・SD1の続きを検出。
 26日(金) 更北中学校職場体験。遺構掘り下げ、SB1床面検出、南西遺構の確認作業。
 30日(火) 全体に水が湧くため、住居など深さがある遺構の排水作業を行う。
 8月1日(木) 東側土坑の遺構掘り下げ。SB1床面と柱穴を検出。
 2日(金) 遺構検出作業、掘り下げ。
 5日(月) C区重機掘削、遺構はない事を確認。
 6日(火) 調査区東側の土坑検出・掘り下げ。
 7日(水) 南西上面遺構の写真撮影後、掘り下げる。
 8日(木) C区トレンチ断面図と全景写真を撮り終了。
 B区南西側、井戸2基を検出し掘り下げる。
 9日(金) 午前排水・清掃、調査区全景写真撮影。午後に井戸跡と建物跡の個別写真。
 19日(月) 調査区全体の清掃を行い、空撮。
 午後に撤収の準備を行い、作業員作業を終了する。午後から測量。
 20日(火) 測量とSB1カマド微細図作成。
 21日(水) 測量図結線。土器の取り上げを行い、現場での作業を終了する。



B区重機表土除去



作業風景 (B区)



更北中学校職場体験



作業風景 (B区)

3 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として、長野市埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下の通りである。

なお、発掘調査に伴い必要となった掘削用重機や作業員休憩所等の機材は、開発業者より現物提供を受けた。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	近藤 守
総括責任者		教育次長	竹内 裕治 (令和元)
			樋口 圭一 (令和2)
総括管理者	長野市教育委員会文化財課	課長	小柳 仁彦
調査責任者	長野市埋蔵文化財センター	主幹兼所長	石田 正路 (令和元)
		所長	大井 久幸 (令和2)
調査担当者	長野市教育委員会文化財課 (埋蔵文化財センター担当)	課長補佐	飯島 哲也
調査機関	長野市埋蔵文化財センター		
	庶務担当	係長	小林 晴和
		事務職員	宮本 博夫
			宮崎 千鶴子 (令和元)
			平林 満美子 (令和2)
	調査担当	係長	風間 栄一
		主事	小林 和子
		研究員	遠藤 恵実子 (主任調査員)
			小野 涼香 (調査員)
			田中 暁 穂 篠井 ちひろ
			清水 竜太 社本 有弥 (令和元)
			井出 靖夫 (令和2) 伊藤 愛 (令和2)
発掘作業員	岩井 洋芳 植木 義則 上原 律江 江守 久仁子 大谷 盛孝		
	岡沢 貴子 金井 節 北村 秀樹 月岡 純一 峯村 茂治		
	峯山 真由美 宮尾 弘子 向山 久 村田 岳仁 山本 光洋		
	渡辺 由美		
整理調査員	青木 善子 市川 ちず子 鳥羽 徳子 武藤 信子		
整理作業員	飯島 早苗 清水 さゆり 西尾 千枝 侍井 かおる 宮島 恵子		
	三好 明子		
遺構測量・空撮業務	株式会社 写真測図研究所		
本体工事請負者	長電建設株式会社		

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

桐原牧野遺跡は、千曲川の中流域に広がる長野盆地にあり、長野市の中心市街地の東北、桐原地区に位置する。遺跡が立地する浅川扇状地は、標高1,917mの飯縄山を水源とする浅川の堆積作用によって形成され、浅川東条を扇頂に、扇端は南の城東・西和田で裾花川旧流路と接し、東の金箱・富竹付近で千曲川氾濫原の後背湿地にまで広がっている。この中で桐原地区は、標高375～380m付近に位置する。浅川扇状地上にはこれまでに多くの遺跡が確認されており、本遺跡もそのうちの一つである。

2 周辺の遺跡

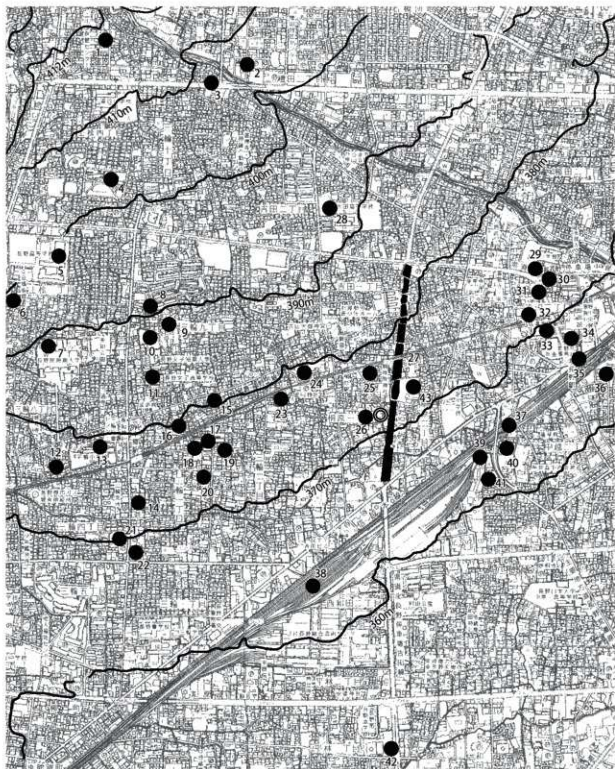
浅川扇状地遺跡群において、遺構が確認されはじめるのは縄文時代前期前葉からである。檀田遺跡(2)では中期の集落と、埋甕などの墓が確認されており、住居からは土偶も出土している。吉田古屋敷遺跡(33)は後期の集落で、後期前葉の敷石住居が1軒確認されている。

縄文時代までは点的であった集落が広く展開しはじめるのは弥生時代からで、その数とともに立地範囲が拡大していく。特に中期から後期にかけては、本村東沖遺跡(5)や、弥生時代後期初頭の吉田式土器の標式遺跡である長野吉田高校グランド遺跡(28)で集落が確認されている。また、この時期の地域交流を示す資料として、本村東沖遺跡と長野女子高校校庭遺跡(10)で北陸系土器の良好な資料が出土し、吉田高校グランド遺跡では、東北地方との関わりを示す天王山式土器とアメリカ式石鏃が出土している。標高365m付近に位置する北長野貨物駅遺跡は、後期箱清水式土器の基準資料が出土したとして知られている遺跡であり、ここでの明確な遺構の確認はみられないものの、隣接する中越遺跡(40・41)では該期の集落が確認されている。

古墳時代では浅川扇状地上でも、標高360mよりも高い場所で、中期から後期にかけての集落が多く確認されている。本村東沖遺跡(4～6)の古墳時代中～後期の集落は、地附山の直下に位置する立地と出土須恵器の特徴などから、地附山古墳群との関連性が指摘されている。標高350m地点でも、古墳時代から平安時代の集落である平林東沖遺跡(42)が確認されている。また、居住域とともに周溝墓も確認されており、檀田遺跡や吉田四ツ屋遺跡では、古墳時代前期の前方後方形周溝墓がみられ、このほかにも弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓は、浅川扇状地遺跡群泉道高田若槻線地点(27)を含めて、いくつかの遺跡にみられる。

奈良・平安時代では、三輪遺跡(12～20)で、古墳時代後期から平安時代にかけて集落が連続している様子がみられ、周囲の遺跡においても同じ傾向がみられる。

桐原地区では、長野電鉄桐原駅の周辺を中心に調査が行われており、これまでに弥生時代から平安時代にかけての集落が多く確認されている。集落域の他に、返目遺跡(23)や桐原宮北遺跡(25)、浅川扇状地遺跡群泉道高田若槻線地点(27)では周溝墓群が造られた墓域が展開し、古代では円面硯などが出土していることから官衛的な施設が存在する可能性が考えられる場所でもある。



- 1 湯谷東古墳群 2 檀田道跡 3 浅川端道跡 4~6 本村東沖道跡 7 本村南沖道跡 8・9 下宇木道跡
 10 長野女子高校校庭道跡 11 相ノ木城跡 12~20 三輪道跡 21 旭幼稚園道跡 22 本郷前道跡 23 返目道跡
 24 桐原宮西道跡 25 桐原宮北道跡 26 桐原牧野道跡 27 浅川扇状地道跡群県道高田若槻線地点 28 吉田高校グラ
 ンド道跡 29~31 吉田町東道跡 32~35 吉田古屋敷道跡 36 吉田四ツ屋道跡 37 浅川扇状地道跡群新幹線地点
 38 国鉄車両基地道跡 39 北長野貨物駅道跡 40・41 中越道跡 42 平林東沖道跡 43 桐原要害
 ○本道跡 (等高線：大正15年測量、昭和27年修正図を基に作成)

図3 調査地周辺道跡位置図 (1:15,000)

第Ⅲ章 調査成果

1 調査概要

発掘調査は、調査区をA区(道路部分)・B区(建物部分)・C区(転回広場)に分けて行った。遺構の所属時期は、古墳時代前期・後期と平安時代で、その内訳は住居跡4軒(古墳時代前期1、古墳時代後期2、平安時代1)とカマド痕とみられる焼土塊が2ヶ所、平安時代の井戸跡2基、建物跡1棟、性格不明遺構1、このほか溝跡、土坑、ピットである。

A区の概要としては、調査区東側で平安時代住居跡(SB1)と主に土坑を検出した。土坑の底に上面が平らな石が置かれたものが3基あり、この内1基では円形の窪みがみられ、礎盤石と考えられる。この他の1基は底部に完形の杯が置かれたものである。中央部分では東西幅6.2mの溝状の遺構(SX1)があり、底部では土器とともに南北方向に並んだレキ石列を検出した。SX1より西側では、壁面に炭化材が並ぶ古墳時代前期の住居跡(SB3)がある。

A区は東西方向に長い調査区であり、調査区東側と西側とでは検出面の様相が異なる。平安時代の遺構がある東側は黄褐色土であるが、1/3ほどからレキ石を含んだ暗褐色土となり、この範囲にSX1が位置し、これより西側ではレキ石はみられなくなり、SB3が位置している。

B区では、古墳時代後期と平安時代の住居跡、井戸跡、建物跡、溝跡、土坑を検出した。古墳時代後期住居跡(SB1)は、全体を検出し、良好な状態でカマドと柱穴を確認した。さらに住居中央には、炉の可能性のある55×120cm範囲の焼土面がある。もう1軒(SB2)は調査区の南端で一部を確認したのみである。B区の南西では古墳時代後期住居跡や平安時代の井戸跡、そのほか掘り込みが重複して存在しており、遺構としての検出は明確ではないものの、焼土や床面とみられる範囲があることから、住居跡がもう1軒存在した可能性が考えられる。

B区もA区と同様に調査区の東西で検出面の状況が異なっており、西側の住居跡が位置する明褐色土の検出面と東側のレキ石を含む面とがみられ、この境には南北方向の溝跡が位置する。溝跡は幅30～45cmほどとさして大きなものではないが、長さはB区の南北方向で両端とも調査区外となり、覆土中からの遺物がほとんど無い中で、完形のミニチュア土器が出土している。

また、A・B区で1ヶ所ずつカマド痕とみられる焼土塊を検出した。A区では古墳時代前期住居跡(SB3)上層の、B区では南西側遺構群の上層に位置しており、検出した住居跡の上部に重複した住居が存在した可能性が想定される。時期については、A区では古墳時代前期住居跡の覆土に影響しない高さであるのに対して、B区では遺構の上面として掘り上げたものの下面の遺構とは切り合っている可能性が高く、平安時代に当たるものと考えられる。この2つの焼土塊の間に位置するB区古墳時代後期住居跡の上面から完形の杯が出土していることを含め、平安時代の遺構が広く存在していたことが想定される。

この他の本調査区での特徴として、周辺で行われた調査では基本的に湧水がみられない中で、本調査区では特にA区SX1、SB3とその周辺で遺構を掘り下げた時点で水が湧いてくる状態であったことが挙げられる。A区 SX1、B区の井戸跡や溝跡といった水に関わる遺構の存在が示唆される。また、これよりも約47m南西に離れた位置にあるC区では、A・B区の検出面に相当する層序から砂およびレキ石のみの層となり、遺構は存在しない場所であることを確認した。この層については自然流路などの可能性もあり、周辺を含めた古墳時代から平安時代にかけての集落域の中で、水に関わる場所であることがうかがわれる。



图4 调查区全体图 (1:500)

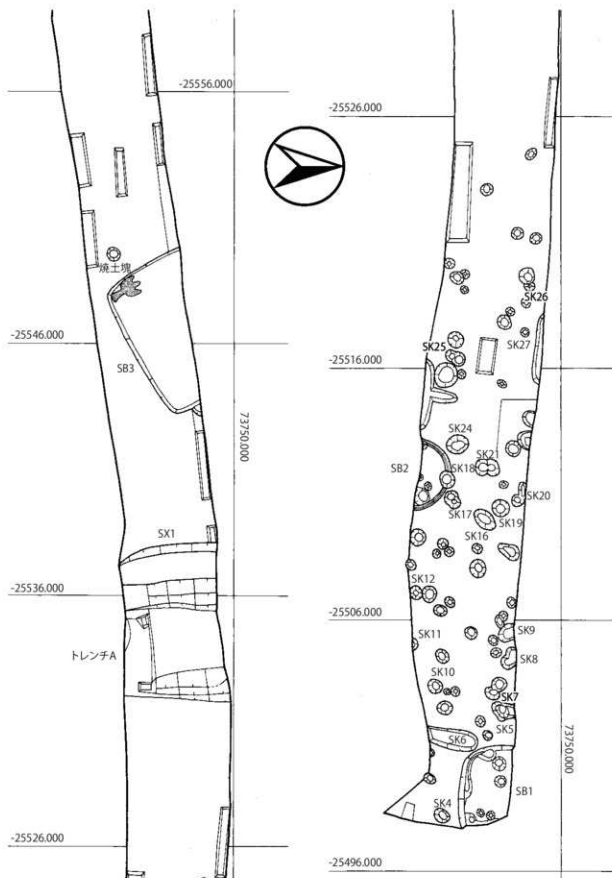


図5 A区全体図 (1 : 150)

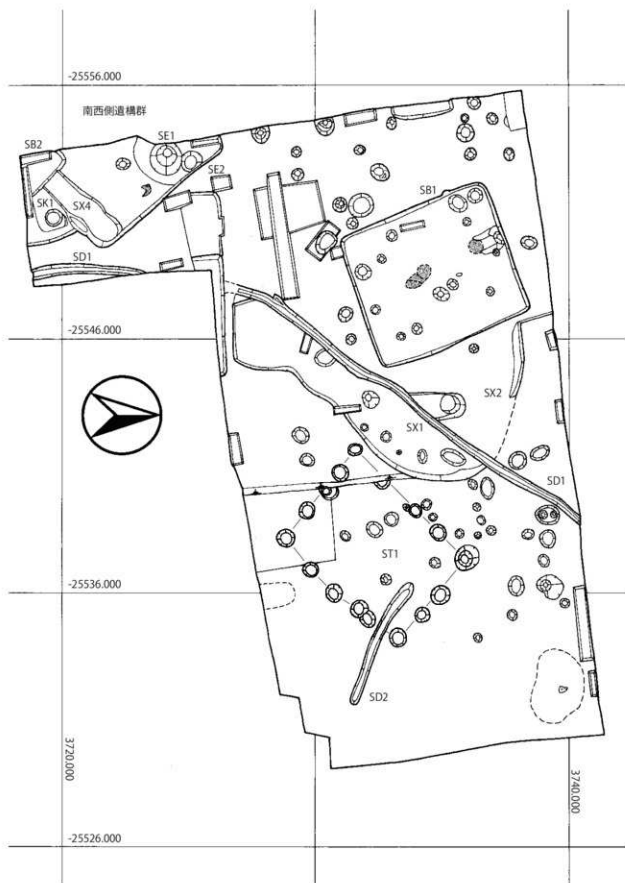


图6 B区全体图 (1:150)



調査地遠景（令和元年7月18日撮影、調査区の南東から飯縄山を望む）



調査地空撮（上が北）



A区 (西側) 空撮 (上が北)



B区空撮 (上が北)



A区全景（東から）



B区全景（南西から）

表1 遺構観察表

区	遺構名	時期	遺 構			土 器		
			平面形 (規模m)	検出率	施設・主軸・重複 ほか	個別 図版	出土量 (g)	実測数 図 版
A	SB1 1号住居跡	平安時代	隅丸方形 —	1/3	炭化面の上に土器 壁際一部周溝	図-7	2,600	7 図22-33~39
A	(SB2) 欠番	平安時代	(円形) —	1/2	掘り込みの中に土坑が入る (土器は遺構内土坑出土)		180	2 図22-44・45
A	SB3 3号住居跡	古墳時代 前期	長方形 5.8×—	2/3	床面壁際に炭化材が並ぶ	図-8	1,250	2 図20-1・2
A	SK10 10号土坑	平安時代	円形 径:0.54	完	底部に上面平坦な石 礎石、(円形のくぼみ有)	図-18	30	
A	SK12 12号土坑	平安時代	円形 径:0.54	完	底部に完形の杯1 (ほか覆土中土器あり)	図-18	265	2 図22-40・41
A	SK26 26号土坑	平安時代	円形 径:0.42	完	底部に上面平坦な石 礎石	図-18	5	
A	SK27 27号土坑	平安時代	円形 径:0.34	完	底部に上面平坦な石 礎石	図-18		
A	SD1 1号溝跡	平安時代	—	一部				25
A	SK ほか土坑	平安時代	円形		覆土中土器(片)があるもの、 用途不明		1,841	1 図22-42
A	SX1 性格不明遺構	古墳時代 後期	溝状? 幅:6.2 (東西方向)	一部	覆土下層から底面にかけて 土器、底面に石列。底面付近 から水が湧き始める	図-15 ・16	15,475	14 図20-16~21 図21-22~29
A	焼土塊	平安時代	—	完	土器を含む焼土塊、カマドあと。 SB3の上面に位置する。	図-19	75	1 図21-30
A	ピット							103
A	トレンチ				調査区西側、遺構および 下面確認			
A	検出面						2,810	3 図22-48~50
B	SB1 1号住居跡	古墳時代 後期	方形 6.3×5.6	完	カマドと周辺に土器、 住居中央に焼土面がある	図-9・10	8,830	13 図20-3~15
B	SB2 2号住居跡	古墳時代 後期	方形 —	1/5		図-12	350	1 図21-31
B	SD1 1号溝跡		幅: 0.30~0.45 深: 0.15~0.25	一部	南北方向	図-14	155	1 図21-32
B	SD2 2号溝跡	平安時代	幅:0.3~0.4 長さ:5.4	完	北西から南東方向		70	
B	SE1 1号井戸跡	平安時代	円形 径:2.0	4/5	SE2と接する。縁に石が置 かれている。断面すり鉢状	図-15		
B	SE2 2号井戸跡	平安時代	円形 径:0.88	完	SE1と接する。断面筒状	図-15		
B	ST1 1号建物跡	平安時代	柱穴:円形 径:0.5~0.88	完	柱穴14本(P-1~P-14) 主軸:北東 4×3間	図-17	375	
B	SK ほか土坑		円形					95
B	SX1~4	平安時代			SD1以西の範囲、包含層土 器を含む		1,015	2 図22-46・47

第Ⅲ章 調査成果

区	遺構名	時期	遺 構				土 器	
			平面形 (規模m)	検出率	施設・主軸・重複 ほか	個別 図版	出土量 (g)	実測数 図 版
B	調査区南西 遺構群	平安時代			住居と溝状遺構などが重複 する範囲	図-11	9,875	2 図22-43
B	焼土塊	平安時代			土器を含む焼土塊、カマド跡 南西遺構の上部に位置する	個別写真	760	
B	トレンチ						90	
B	検出面						7,770	5 図22-51～55
C	検出面				C区遺構検出なし 砂層（河川等）		75	1 図22-56

計：54,119

2 遺構

1 住居跡

・ A-SB1

遺構は北と東側が調査区外となることから、全体の1/4ほどの検出で、ほとんどが調査区外となっている。平面形はやや角の丸い方形であり、この位置での遺構の検出は明確であった。床面は、貼り床はみられないものの全体に固く締まっている。検出範囲でのカマドの検出はなかったが、調査区北壁際では焼土と土器が集中している部分を検出した。焼土と同じ位置にある土器はいずれも寛(図22-37・39)であり、調査区外へ広がることから全体の確認には至らなかったが、住居跡の中央に近い場所にあることが推測される。住居内では土坑のほか、

南西のコーナー部分を中心に、10~20cm幅の周溝がみられる。このほか覆土中から床面付近にかけて杯類が多く出土している。

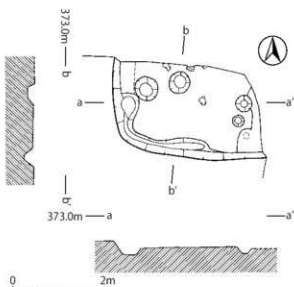


図7 A-SB1実測図(1:80)



A-SB1全景(南から)

・ A-SB3

A区西側に位置し、調査区北壁にかかることから検出は全体の1/2ほどである。規模は全体を検出した東西方向で5.8mの方形である。検出面は東側よりもレキ石の少ない面となり検出状況は明確で、東端の平安時代住居跡(SB1)とはほぼ同じ高さである。

検出時に、上面にカマドの可能性のある焼土塊があったことから(図5)、焼土塊の取り上げ後に掘り下げを行った。覆土中からの遺物はほぼみられなかったが、床面付近から炭化物が混じりはじめた。床面では形の残る炭化物が多くみられたため精査を行っていったところ、床面で15~40cm大の炭化材を検出した。炭化材は壁際に位置し、壁面から中央に向かって倒れた形で、壁から内側へ50cmまでの範囲にあり、これよりも内側では、炭化物はなく硬化した面となる(図8破線内側)。検出状況からは南東壁側の中央部分が少ないものの、壁面全体に存在するものとみられる。

床面は掘り下げ時から水が湧いたため、常に水がつく状態ではあったが、検出面から床面までの深さが20cmほどで、炭化材が良好に残っているのに対して土器の出土量は少なく、赤彩の壺と器台(図20-1・2)のほかは、赤彩された土器片が僅かにみられるのみである。

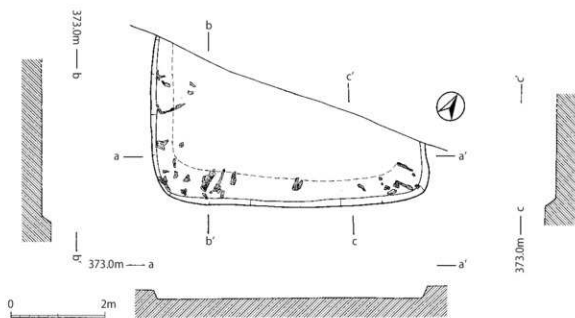


図8 A-SB3実測図(1:80)



A-SB 3 全景 (南西から)



A-SB 3 全景 (北東から)



A-SB 3 南壁炭化材 (北東から)



A-SB 3 東壁炭化材 (北西から)

・ B-SB1

B区の北西側に位置する。遺構の全体を検出し、規模は南北6.3m、東西5.6m、主軸は北西を向く。

検出時は東側に平安時代の遺物のある落ち込み（SX2・3）が近接し、遺構上面では平安時代の完形の杯が出土するなどしたことから平安時代の遺構と考え、遺構の範囲についても検出が不明瞭であり複数の遺構が重複する可能性も考慮してトレンチでの確認を行ったところ、遺構は住居跡1軒で、トレンチからは平安時代の遺物が主体の包含層が上面全体に残っていたことを確認した。

カマドは北側壁面のやや西寄りに位置する。検出時からこの範囲を中心に土器が多く出土しており、住居内出土の土器のほとんどはカマドとその周辺からのものである。カマドは掘り下げ時には壁面に接する位置で焼土と焼土に混じった状態での土器を、その前面で長さ40cmの石を検出した。ここから住居内に向かって同じく覆土中に炭化物および焼土が混じった状態であり、壁面から60cm内側で袖石を検出した。袖石前面では、上面に土器がのった硬化した焼土面が広がり、また周囲の覆土は特に焼土が多く入っていたことからこの部分までを検出し、

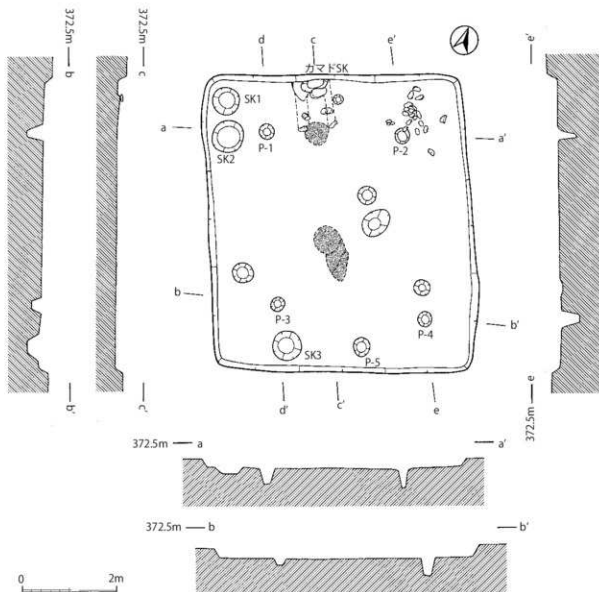


図9 B-SB1実測図（1：80）

この時点で土器・石材検出状況としての記録をとった。(図10)

上面の土器と土混じりの焼土を除去したところ、壁際では石と壁面の間に幅55cmの掘り込み(カマドSK)があり、袖石の中は硬化した焼土面となっている。袖石は4個で床面から13~17cmほどの高さがあり、中央に向かって斜めになったアーチ状に据えられている。

床面は明灰色と明褐色で全体に硬く明瞭である。住居跡中央の南寄りの位置では、硬化した焼土面を検出した。カマドの正面南にあたる位置で、径が約55cmの円形の特に硬化した部分とその南側にも65cmほどの範囲にわたって焼土面が広がっている。石材など付属するものはみられないが、位置と形状から炉としての可能性が考えられる。柱穴はP-1~4の4本で、径は32cm~35cm、深さはP3が20cm、P1・2・4が36~40cmである。

このほかSK1・2はカマドの西側で径60~65cmの大きさの土坑が2基近接して並んでいるものである。土坑内からの遺物の出土はない。

土器の出土は、カマド内とその周辺に集中している。また、住居北東隅の床面には石が集中している。壁際から北東の柱穴(P-2)までの範囲に15~20cmの大きさの石が20個ほど置かれている。調査区内では見られない川原石で、同じ大きさのものがいずれも床面に接した位置にあることから、住居の床面が機能していた段階で存在していたものと考えられる。さらに、柱穴であるP-2の上部に掛かっていることから、住居の廃棄に伴って柱が取り除かれた後に置かれたものと考えられる。住居廃棄に際して、またカマドの廃絶とも関連して、何らかの儀礼的行為が執り行われた痕跡である可能性も指摘される。



B-SB1 住居中央焼土面からカマド(南から)

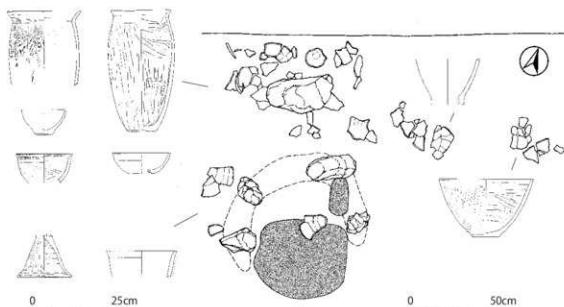


図10 B-SB1カマド土器・石材検出状況実測図(カマド=1:20、土器=1:10)



B-SB1 全景 (南から)



B-SB1 カマド東側床面石 (南西から)



B-SB1 カマド土器検出状況 (南から)



B-SB1 カマド土器検出状況 (南から)



B-SB1 カマド石材・焼土面検出状況 (南から)



B-SB1 カマド石材・焼土面検出状況 (南東から)

・B区南西側遺構群

B区範囲の中で南側に出た一角を中心に、検出時から北側よりも土器の出土が多かった場所である。このため、当初は包含層を残したものととして全体を掘り下げていき、ある程度包含層が残っていたことを確認し、地山面を検出した。全体を同じレベルで揃えた時点で、遺構または掘り込みが複数存在する範囲として掘り下げることで、まず上面に位置する焼土塊を取り除いた時点で再度検出作業を行った。

以上の結果、東側で北東から西方向の遺構の一边を検出し、西側に向かって方形の遺構が存在することを確認した。この遺構部分は検出面から18cm下が底面となり、壁面から内側に50cmほど入った位置で焼土を検出した(中央部分)。はじめはカマドを想定したが、焼土の範囲が壁面より内側で収束することからこの遺構に伴うカマドとの判断はできなかった。しかし、壁面から西側(調査区外)まで同じレベルで硬化面を確認したことから、この面を床面と判断し、焼土はこの面に位置し、同じ面から杯(図22-43)が出土している。また、この南側にはSX 4が重複し、SX 4の西側にSB 2が位置する。さらに北側にSE 1・2が重複するが、北側で角部を確認し、SX 4を含むためこれよりも小さくなる可能性はあるものの、南北方向で6.3mを測る。

なお、南西側遺構群の重複は、古い順にSB 2→中央部分→SX 4→SE 1・2→上面焼土となる。

中央部分の遺構については、北東方向の一边を確認したのみであるが、床面の位置で焼土面があることから、住居跡の可能性が高いものと判断され、焼土塊のみものとは検出のレベルが異なっていることから、2軒の住居跡が重複して存在していたことが想定される。

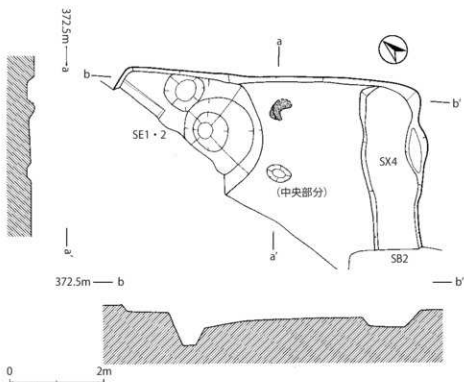


図11 B区南西側遺構群実測図(1:80)

・B-SB 2

調査区南西端に位置する。遺構や掘り込みが集中する中で検出は明瞭であった。ほとんどが調査区外となるため、検出は一部であることから規模は不明であるが、北側角を検出し平面形は方形である。検出面から床面までの深さは20cmあり、床面は明瞭である。土器は少ないが、甕の把手と内黒土器が出土した。北東側で重複するSX 4との新旧関係は、SB 2の方が深いことから優先して掘り下げた結果、SX 4よりも古い時期と考えられる。

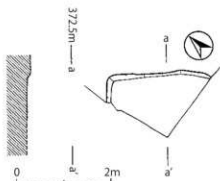


図12 B-SB 2実測図(1:80)



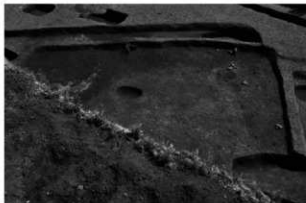
B-SB2 全景 (南西から)



B区南西側遺構群完掘 (南西から)



B区南西側遺構群上面検出状況 (南東から)



B区南西側上面遺構 (南西から)



B区南西側遺構群南側 (南西から)



B区南西側遺構群周辺 (南西から)

・焼土塊

A区とB区で各1つ、計2つを検出した。遺構検出時に焼土を確認し全体の範囲を広げていったものである。位置は、A区では古墳時代前期住居跡、B区では平安時代遺構の検出の上部にあり、これに伴う掘り込みなどの検出はなかった。2つのうち、検出状況が良好であったA区のものについて図を掲載した(図13)。なおB区については、焼土を確認した時点で、A区と同様のものであると判断し、同じく記録後に下面の遺構の検出を行った。

出土土器については、周囲の土を取り除く際に出したものの内、焼土の範囲外のもの検出出土として取り上げている。

A区は検出時から焼土がみられ、北側にトレンチを入れて確認を行ったところ、検出面から10cm前後の厚さの焼土の堆積であった。焼土の掘り出しを行った結果、範囲は南北150cm、東西が75cmの歪形の塊状と周囲には焼土面(図13破線部)を検出した。B区についても、これと同じ状態であったことから、同類の遺構とした。

いずれも現状からは元の形を推測するには至らないが、カマドの粘土構築部分が崩れたものと考え、A区では古墳時代前期住居跡の、B区では奈良・平安時代の住居跡等の上に別の住居跡が重複して存在していたことが推測される。

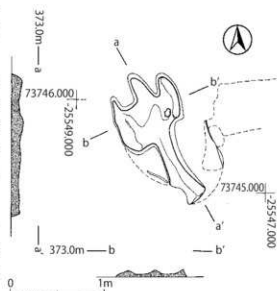


図13 A-焼土塊実測図(1:40)



A区焼土塊検出状況(北西から)



A区焼土塊(北西から)



A区焼土塊(東から)



B区焼土塊(南西から)

2 溝跡

・B-SD1

北東から南西方向にのびる溝跡である。検出作業ではほかの遺構よりも早い段階で確認することができたもので、北から南にかけてやや蛇行しながら直線的にのびるものの、調査区南西部分では南側に向かって方向が変わっている(図6)。覆土中からの遺物がほぼ無い中で、完形のミニチュア土器(図21-32)が1点出土している。長さについては、両端とも調査区外にかかるため不明で、幅は30cm~45cmと一定ではなく、深さは15cm~25cmである。

調査区内での位置は、SB1の東側にあり、一部SX1・2などの落ち込みの中にある。これと合わせてB区内での遺構検出面の状況を見ると、西側は明褐色土層での遺構は住居跡があるのに対して、東側は赤褐色のレキ石を多く含む面で、遺構(建物跡、土坑)は上面に乗ったレキ層の下から検出したものが多い。調査区内でこのような差がみられ、SD1はこの境に位置している。また遺構からみても、西側は住居(古墳時代後期、平安時代)などの遺構があるのに対して、東側は建物跡と土坑・溝のみとなっている。

なお、南側は調査区外となることから不明であるが、北側はA区と連続する位置関係となるが(図14)、A区では溝はみられない。さらに、北側は真つすぐにのびていることからそのまま延長をするとA-SX1に当たる位置となる。以上のことからSD1は、A区とB区の間で収束していることが考えられるものの、同じくA-SX1も調査区の間で収束することから、SD1とは重複している可能性も考慮される。

なお、このA-SX1との共通点としては、遺構を境として検出面の様相が変化することである。A-SX1が

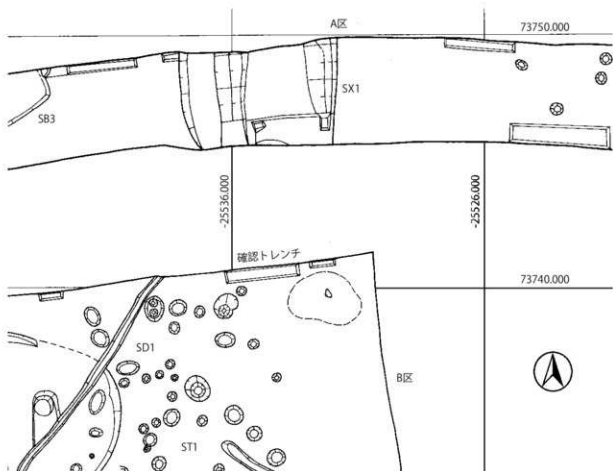


図14 B区北東、A区中央部分実測図(1:150)

古墳時代後期で、SD1はこれよりも新しいものと考えられることから、時期差はあるものの地形を基に造られた遺構であることが推測される。B区他の遺構との関係からも、検出面からみられる土質の変換点を意識して掘られたものであることが考えられる。また、覆土の堆積状態により一度に埋没したと看取されることから、覆土中からの遺物がほぼみられない中で出土した完形のミニチュア土器は、廃棄に際して意図的に入れられた可能性も考えられる。



B区北東端、A区中央部（空撮、上が北）



B-SD1（北東から）



B区北壁面（A-SX1延長部分）

3 井戸跡

・B-SE1・2

B区南西側の遺構・掘り込みと重複する位置にあり、南西側の上面の遺構を掘り下げた時点で検出をした。円形の井戸跡2基が接する位置にあり、SE1が上面の西側一部が調査区外にかかるが、ほぼ全体を検出している。検出は2基同時に行い、検出面から約25cm掘り下げた時点で一度検出の大きさが変化しており、特にSE2の西側がテラス状になること、断面からもこの位置から掘り込みの角度が変化していることから、この位置が遺構の上面となる。

SE1は、検出面で径200cm、底部が30cm、深さ60cmのすり鉢状に掘り込まれており、遺構上面に当たる位置の縁には10~20cm大の石が並んだ石列がみられる。この石は遺構の中などに落ちている状態の箇所もみられることから本来は全体を巡っていたものと考えられ、ここでの径は110cm、石列の推定範囲を含めると150cmとなる。SE2は径88cm、深さは検出面から70cmで、底部から上面までやや開いた形で真つぐ掘り込まれており、SE1の様な遺構に伴う石などはみられない。SE1とSE2は検出面より30cm下の位置で一部接しており、SE2の南側の一部面がSE1の石列に重複していることから、SE2がSE1を切って掘り込まれている。また、SE1と2とは、平面の規模と形状が大きく異なるが、上面と底部の高さが同じであることから同じ用途の遺構であること、重複する位置についても意図して近接した位置に造られたものとみられる。

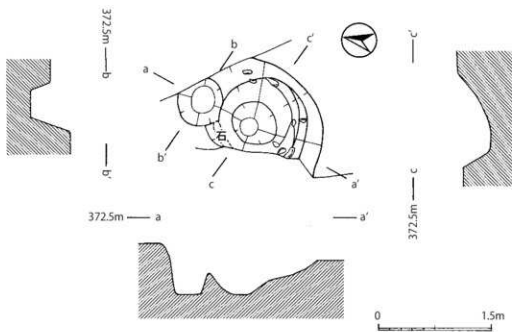
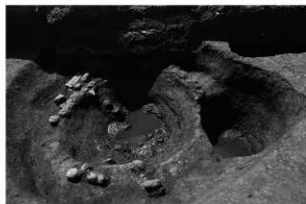


図15 B-SE1・2実測図(1:60)



B-SE1・2 全景 (北東から)



B-SE1・2 (東から)

4 土坑

・A-SK10・12・26・27

SK12は、検出面からおよそ18cm下の底部に杯が1個正位に置かれたものである。底部出土のほか、覆土中からも一部であるが杯が出土している。

SK10・26・27は、底部の中央に上面が平らな石が置かれたものである。土坑の径は35～50cm、深さはSK10が18cm、SK26・27が24cmほどである。石は上面が平らな自然面で、SK10と26は側面の一部を打ち欠いている様子がみられる。SK10は特に円形の窪み状の痕跡が明瞭である。以上から、礎盤石であると考えられ、検出した数も少なく調査区内では建物としての並びを確認することはできなかったが、周辺には礎盤石を持つ建物が存在している可能性が推測される。

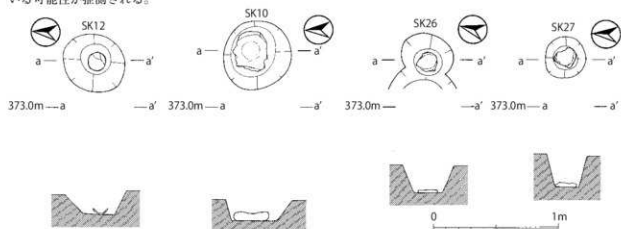
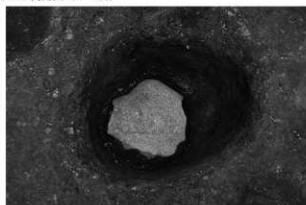


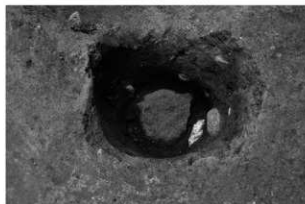
図16 A-SK10・12・26・27実測図 (1:30)



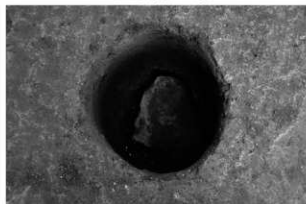
A-SK12全景 (上が南)



A-SK10全景 (上が東)



A-SK26全景 (上が西)



A-SK27全景 (上が北東)

5 建物跡

・B-ST 1

B区東側のレキ石を含む赤褐色土の範囲に位置する。周辺にも土坑やピットが数基みられるが、建物跡の確認は1棟のみである。また、これより東側では遺構はみられない場所である。

遺構は全体を検出し、一部が現代暗渠によって切られているが、柱穴は14本を確認した。規模は、4間×3間（桁行6.8m、梁行5.0m）で、主軸は北東を向く。柱穴はいずれも円形の素掘りで、径は50cm～88cm、深さは一番深いP-2で40cm、全体ではおおよそ30cmの掘り込みで、遺物は覆土中から土器片が数点出土したのみである。



B-ST 1 全景（北東から）

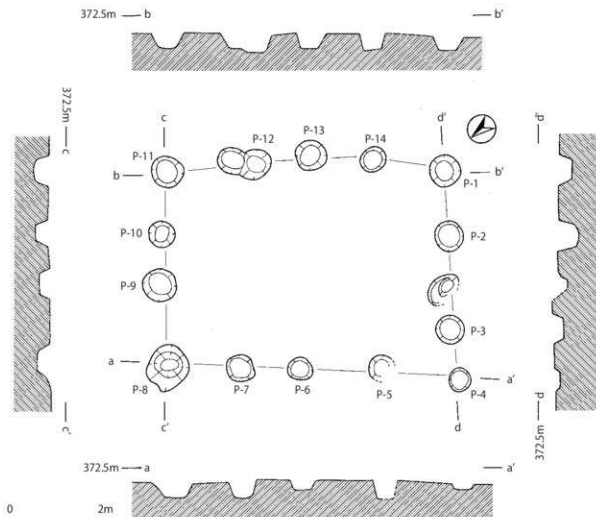


図17 B-ST 1実測図（1：80）

6 性格不明遺構

・A-SX1

A区の中央に位置する。検出は、東側の検出面で土坑や住居跡がある面であったものが、中央部分ではレキ石を含む遺構が見られない面となったため、調査区南壁側にトレンチ（トレンチA）を設定して確認を行ったところ、レキ石群の中から土器が出土したものである。トレンチから範囲を検出した結果、検出全体では東西方向約6.2mの溝状の遺構であった。なお遺構の南側は、はじめに設定したトレンチを底面の下まで掘り下げて下面の確認を行ったもので、遺構下は明褐色の砂層であることを確認した。

検出時から覆土中にレキ石が多くあり、土器がその中に混じる状態で、レキ石については検出面でみられるものより遺構内の方が大きく、周辺のものとは異なる。

断面は全体に緩い船底状であり、大きく3段に掘り込まれている。底部は東側検出位置から135cm、西側は260cmと東に寄っており、西側では2段目の面が広く平らになっている。底と立ち上りの斜面部から土器と円レキが多くなり、土器は2段目の位置（図19第5層）から多くなっていき、壁面での確認を行いながら掘り下げていったところ、30cm以上の堆積であったことから出土位置を上下に分けて記録を行った。調査区北壁では完形の甕など形が残るものが多くなり、特に底部を中心に土器が置かれていたものとみられる。底面は暗赤褐色砂層で、底面の中央よりやや西側の位置では底面部で円レキが南北方向に並んでいる（図18底面破線部分）。

遺構の範囲は、北側は調査区外にのび、南側はトレンチから遺構内であることを確認したが、南側のB区では延長にあたる位置での遺構が確認されなかったことから（26ページ写真）、A区とB区の間で収束していることを確認した。以上から遺構の範囲については、当初考えられた溝状の遺構ではない可能性も考慮されるが、遺構の特徴としては、底面付近から地山面とは異なるレキ石が入るなど、自然流路であると推測される。

遺構完掘後に、調査区北壁面で遺構内の土層堆積状況の確認を行った（図19）。層序では第3層からが検出面となるが、主に土器が出土し始めるのは5層からで、遺構壁面に接した状態の土器がみられるはじめる層である。3・5層とも全体に同じ色調の土層であるが、5層の方が

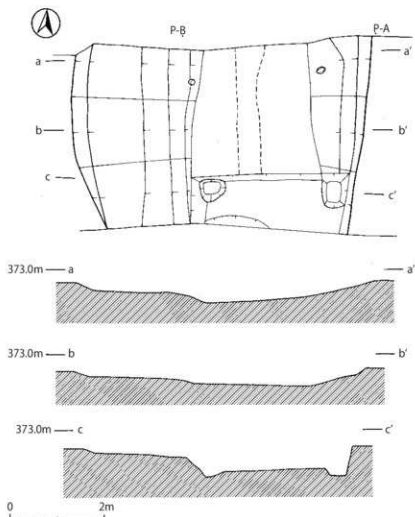
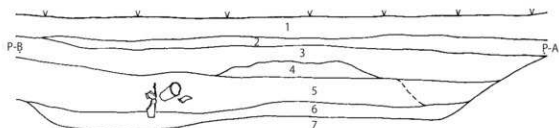


図18 A-SX1実測図（1：80）

大型のレキ石を多く含む層となっている。レキ石が入るのは5層までで、6層からは黄褐色のしまりのある砂層となるが、部分的に5層の黒色土と細かなレキ石が混じっており、底面は砂層のみとなる7層上面にあたり、石列と底面の土器もこの位置である。

373.5m



第1層：盛土

第2層：旧建物基礎

第3層：明黄褐色土層（覆土上層）

第4層：明黄色砂層

第5層：暗黄褐色土層（土器出土上面）

第6層：暗黄色砂層（レキ混・土器出土下面）

第7層：暗赤褐色砂層（地山）

図19 A-SX1調査区北壁断面図（1：30）



A-SX1 全景（東から）



A-SX1 全景（南から）



A-SX1、調査区北壁（南東から）



A-SX1 全景（北東から）



A-SX1 土器・石出土状況 (南西から)



A-SX1 底面石列石 (南西から)

7 C区

B区から南東に直線で47m離れた位置にある。重機による表土除去時から覆土中にはレキ石が多く入り、遺物の出土もほぼみられなかった。現地表面から30cm下でレキ石を含む約20cmの砂層、その下が10cmほどのレキ層、その下(現地表面から約60cm下)が検出面となっており、重機ではこの面まで掘り下げた。なお、土器はこの面からの出土である。

検出作業を行い、遺構の確認がみられなかったことから、下層確認のためのトレンチを設定した。検出面として出した層はうすく、直下からレキ石をほとんど含まない黄褐色砂層、さらに約20cmからはレキ石を多く含む暗褐色砂層となる。

A・B区でも特に西側では、検出面の直上にレキ石を含む層がみられる所もあったが、遺構が存在するA・B区では土層であるのに対してC区ではしまりのない砂層となり、遺構が存在しないことを確認した。調査区が狭く一部の検出であることから範囲については不明であるが、この位置に河川などの自然流路が存在している可能性が考えられる。



C区全景 (南西から)



C区西壁面

3 遺物

古墳時代

土器の出土位置は、遺構内からが大半であり、前期はA-SB3のみ、後期はA-SX1とB-SB1出土のものがほとんどである。

A-SB3 口縁に3ヶ所並んだ穿孔のある赤彩の壺(1)と器台(2)の受部である。器台の口縁は端部が立ち上がり、器台底部に穿孔は認められない。

A-SX1 須恵器模倣杯(16)は底部が丸く、立ち上がりが高く直立する。甕は器高35cm前後(22-25)の大型と25cm前後(26-27)の中型の2種類がある。大型の口縁は外反し(23)、24は「く」の字にひらく。中型の26の外反は緩く、27の胴部は上部でふくらみ、口縁が内向する。壺(21)は口縁部が真っすぐ上にのびる。須恵器甕(29)は口縁径23cm、胴部最大径が37cmの大型で口縁部に断面三角形の突帯をもち、調整は外面タタキ、内面青海波文である。このほか甕の把手(28)が出土している。高杯(20)は杯が深めの半円形で口縁が内側に入る低脚で、胎土は、他のものよりも1~3mm大のレキを多く含んでいる。須恵器は大型甕のみで、このほか土師器では模倣杯がみられる。

B-SB1 高杯(15)は脚部が上部から裾部までハの字に開き、端部に面取りのある須恵器模倣である。長胴甕(12-13)はハケ調整で口縁がくの字に外反する。須恵器はみられず模倣品を含む土師器のみであり、内黒処理は杯と甕で全体での割合は少ない。

A-SB3 弥生時代後期箱清水式の要素が残る古墳時代前期初頭の段階である。後期では、B-SB1が屋代編年の7期、榎田編年ではⅢ期古相からⅣ期にかけての6世紀初頭から前半の古墳時代後期の中でも早い段階、また同じ浅川扇状地に位置する本村東沖遺跡6段階に後続する時期に属する。A-SX1はB-SB1に後続する後期前半、榎田編年Ⅳ期、6世紀前半代である。

平安時代

明確な遺構の検出が少なかったことから遺構に伴うものは少ないが、全体に遺構が広がっていた可能性もあることも含め、検出遺構上面の包含層からの出土が多い。

A-SB1 須恵器は1点のみで土師器が主体である。底部回転糸切の須恵器杯(33)と、土師器では内黒処理の杯と高台付杯、外面ケズリ調整の甕(37-39)がある。杯類の底部切り離し技法は糸切が多く、ヘラ起こし後の静止ヘラケズリ調整が1点みられる。内黒処理の35は、口径はほかと同じであるが、器高が3.6cmと低い。

検出面からは、底部に「十」字の線刻がある高台付杯(49)や白磁(52)・灰軸陶器(51)が出土したほか、破片で緑軸陶器と突帯付四耳壺が出土している。白磁が12世紀後半代、灰軸陶器は9世紀後半(光ヶ丘1号窯期)とみられる。

以上から平安時代は、A-SB1の検出が1/4ほどであることから、全体の様子を見ることはできていないが、屋代編年7・8期相当の9世紀後半代に、調査区全体としては9世紀から12世紀にかけての時期とみられる。

(参考文献)

- 長野市埋蔵文化財センター 1993 「本村東沖遺跡」 長野市の埋蔵文化財第50集
(財)長野県埋蔵文化財センター 1999 「榎田遺跡」 長野県埋蔵文化財センター調査報告37
* 2000 「更埴系里遺跡・屋代遺跡群」 長野県埋蔵文化財センター調査報告54

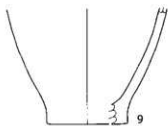
A-SB3 (1・2)



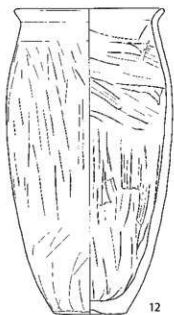
1



2



9



12

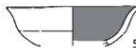
B-SB1 (3~15)



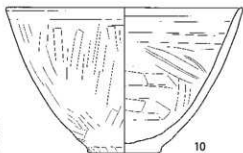
3



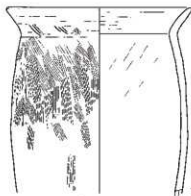
4



5



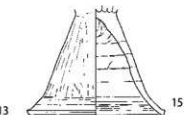
10



13



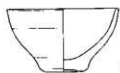
14



15



6



7



8



11

A-SX1 (16~29)



16



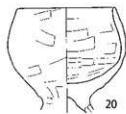
17



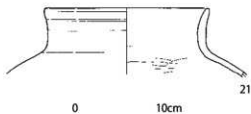
18



19



20



21

0 10cm

图20 土器実測図1 (1:4)

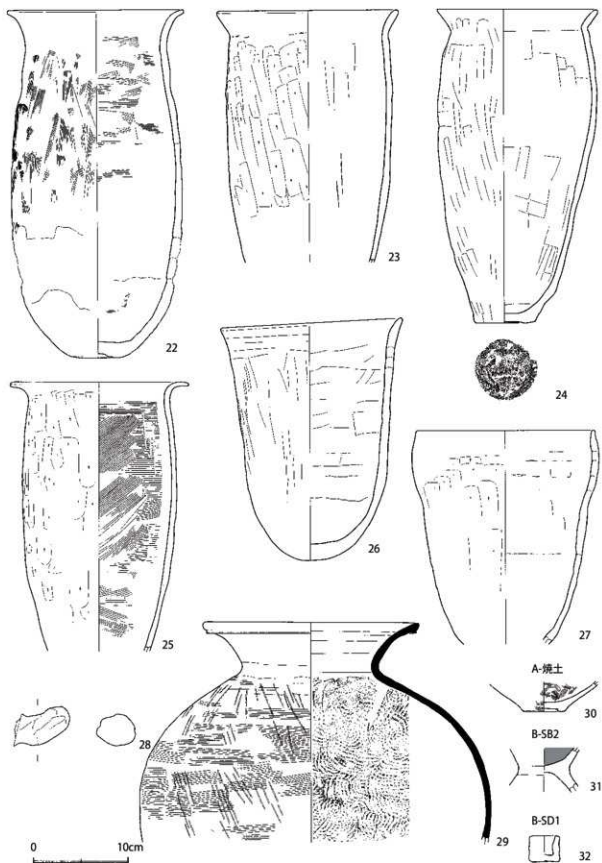


图21 土器実測图2 (1:4)

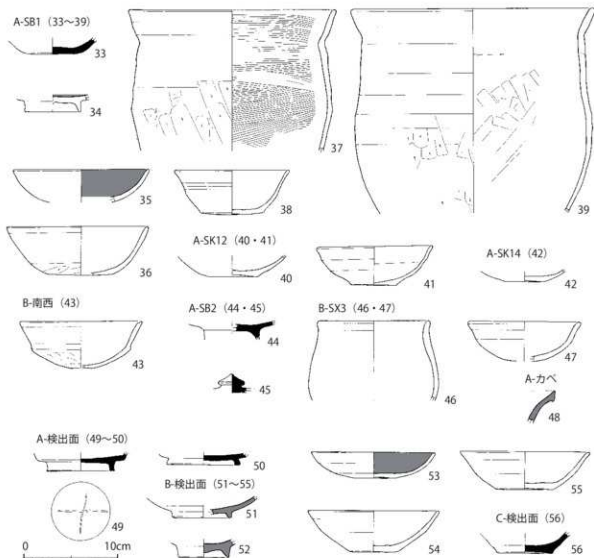
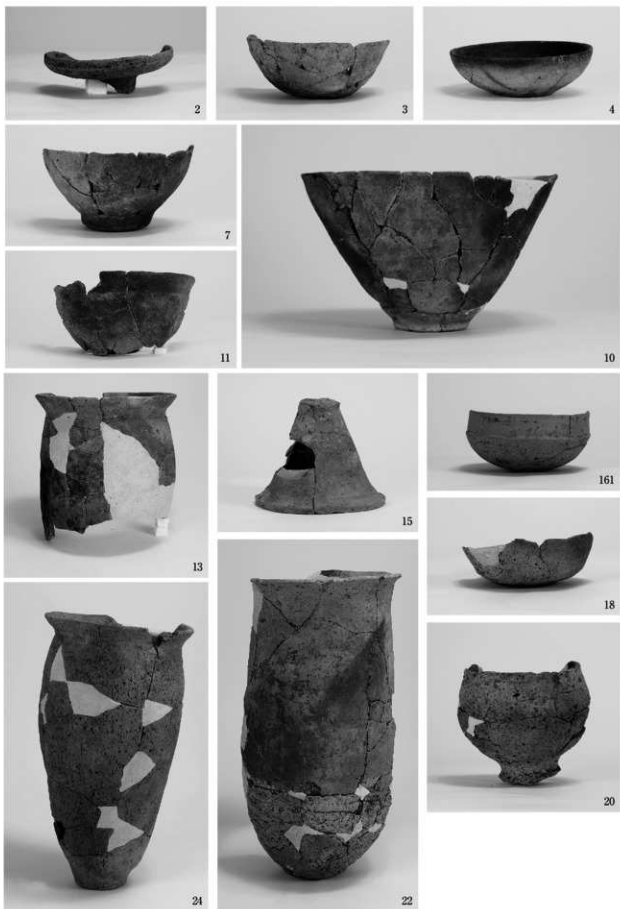


図22 土器実測図3 (1 : 4)

表2 土器・土製品観察表

図版 番号	時期	種別	器種	残存部		調整・その他 内面/外面/底部	出土遺構		
				部位	量		区	遺構	位置
1	古墳時代前期	土師器	壺	口縁～頸部	1/5	赤彩塗彩/赤彩塗彩・穿孔3	A	SB3	覆土上層
2	古墳時代前期	土師器	器台	杯～脚部	1/2	ハケ/ナデ	A	SB3	床上
3	古墳時代後期	土師器	杯	口縁～底部	1/2	ハケ/ハケ	B	SB1	カマドNo2
4	平安時代	土師器	杯	口縁～底部	完	ナデ/内黒処理/回転糸切	B	SB1	覆土上層
5	古墳時代後期	土師器	杯	口縁～胴部	1/4	ハケ/内黒処理	B	SB1	覆土下層
6	古墳時代後期	土師器	杯	口縁～胴部	1/4	ハケ/ハケ-ナデ	B	SB1	カマド周辺
7	古墳時代後期	土師器	杯	口縁～底部	2/3	ハケ/ハケ-ナデ	B	SB1	カマドNo3
8	古墳時代後期	土師器	杯	口縁～底部	1/2	ハケ/ハケ-ナデ	B	SB1	覆土下層
9	古墳時代後期	土師器	甕	胴部～底部	1/3	ハケ/ナデ	B	SB1	カマドNo2
10	古墳時代後期	土師器	鉢	胴部～底部	4/5	ハケ・ナデ/ハケ-ナデ	B	SB1	カマド周辺
11	古墳時代後期	土師器	鉢	口縁～胴部	1/3	ハケ/ハケ	B	SB1	カマドNo4
12	古墳時代後期	土師器	甕	胴部～底部	1/4	ハケ/ハケ	B	SB1	カマド周辺

図 版 番 号	時 期	種 別	器 種	残 存 部		調 整 ・ そ の 他	出 土 遺 構			
				部 位	量		区 遺 構	位 置		
20	13	古墳時代後期	土師器	甕	口縁～胴部	2/3	ハケ/ハケ	B	SB1	カマFNo.3
	14	古墳時代後期	土師器	鉢	口縁～胴部	1/4	ハケ/ハケ-ナデ	B	SB1	カマFNo.5
	15	古墳時代後期	土師器	高杯	脚部	3/4	ハケ-ナデ/ハケ-ナデ	B	SB1	カマFNo.5
	16	古墳時代後期	土師器	杯	口縁～底部	3/4	ナデ/ナデ	A	SX1	覆上No.6
	17	古墳時代後期	土師器	杯	口縁～底部	3/4	ハケ/ハケ-ナデ	A	SX1	覆上No.3
	18	古墳時代後期	土師器	杯	口縁～底部	3/4	ハケ/ハケ-ナデ	A	SX1	覆上No.8
	19	古墳時代後期	土師器	鉢	底部	完	ハケ/ナデ/木葉痕	A	SX1	覆下No.5
	20	古墳時代後期	土師器	高杯	杯部～脚部	4/5	ハケ/ハケ	A	SX1	覆下No.1
	21	古墳時代後期	土師器	甕	口縁～胴部	1/3	ハケ-ナデ/ハケ-ナデ	A	SX1	覆上No.1
	22	古墳時代後期	土師器	甕	口縁～底部	4/5	ハケ-ナデ/ハケ/木葉痕	A	SX1	覆上No.2・3
21	23	古墳時代後期	土師器	甕	口縁～胴部	4/5	ハケ-ナデ/ハケ	A	SX1	覆上No.2・3
	24	古墳時代後期	土師器	甕	口縁～底部	4/5	ハケ-ナデ/ハケ/木葉痕	A	SX1	覆下No.3
	25	古墳時代後期	土師器	甕	口縁～胴部	4/5	ハケ-ナデ/ハケ	A	SX1	覆上No.4
	26	古墳時代後期	土師器	甕	口縁～底部	4/5	ハケ-ナデ/ハケ	A	SX1	覆下No.2
	27	古墳時代後期	土師器	甕	口縁～胴部	2/3	ハケ-ナデ/ハケ	A	SX1	覆下3・4
	28	古墳時代後期	土師器	瓶	把手	4/5	ハケ/ハケ	A	SX1	トレンチA
	29	古墳時代後期	須恵器	甕	口縁～胴部	4/5	ナデ-タタキ/青海波文	A	SX1	トレンチA
	30	古墳時代後期	土師器	壺	胴部～底部	2/3	ハケ/ハケ	A	焼土塊	
	31	古墳時代後期	土師器	高杯	杯部～脚部	1/2	ハケ/内黒処理	B	SB2	覆土
	32	古墳時代後期	土師器	ミニチュア	口縁～底部	完	ハケ-指押さえ	B	SD1	覆土
22	33	平安時代	須恵器	杯	胴部～底部	1/3	ナデ/ナデ/回転糸切	A	SB1	覆土
	34	平安時代	土師器	高台付杯	底部	完	ナデ/内黒処理/静止?糸切	A	SB1	覆土
	35	平安時代	土師器	杯	口縁～底部	1/4	ナデ/内黒処理	A	SB1	覆土
	36	奈良・平安時代	土師器	杯	口縁～底部	2/3	ナデ/ナデ/静止ヘラ	A	SB1	床面北
	37	平安時代	土師器	甕	口縁～胴部	1/5	ハケ-ケズリ/ハケ	A	SB1	床面北
	38	平安時代	土師器	杯	底部	1/2	ナデ/ナデ/回転糸切	A	SB1	覆土
	39	平安時代	土師器	甕	口縁～胴部	1/4	ハケ-ケズリ/ハケ	A	SB1	床面北
	40	平安時代	土師器	杯	胴部～底部	完	ナデ/ナデ/回転糸切	A	SK12	覆土
	41	平安時代	土師器	杯	口縁～底部	4/5	ナデ/ナデ/回転糸切	A	SK12	底部
	42	平安時代	土師器	杯	胴部～底部	2/3	ナデ/ナデ/回転糸切	A	SK14	覆土
22	43	古墳時代後期	土師器	杯	口縁～底部	1/5	ナデ-黒斑/ナデ-ハケ	B	前遺構	下覆土
	44	平安時代	須恵器	高台付杯	底部	1/2	ヘラ/ヘラ切・ナデ	A	SB2	覆土
	45	平安時代	須恵器	蓋	つまみ部	完	ナデ/ロクロナデ	A	SB2	覆土
	46	平安時代	土師器	鉢	口縁～胴部	1/4	ハケ/ハケ	B	SX3	
	47	古墳時代後期	土師器	杯	口縁～底部	1/5	ハケ-ナデ/ハケ	B	SX3	
	48	平安時代	灰釉陶器	長頸壺	口縁～頸部	1/5	ナデ/ナデ	A	検出面	壁面
	49	平安時代	須恵器	高台付杯	底部	完	ナデ/ナデ/回転糸切・縦刻+	A	検出面	
	50	平安時代	須恵器	高台付杯	底部	2/3	ナデ/内黒処理/回転ヘラ切	A	検出面	
	51	平安時代	灰釉陶器	碗	胴部～底部	1/5	ナデ/ナデ/糸切	B	検出面	
	52	平安時代	白磁	碗	底部	1/4		B	検出面	
	53	平安時代	土師器	杯	口縁～底部	4/5	ナデ/内黒処理/回転糸切	B	検出面	
	54	平安時代	土師器	杯	口縁～底部	2/3	ナデ/ナデ/回転糸切	B	検出面	
	55	平安時代	土師器	杯	口縁～底部	2/3	ナデ/ナデ/回転糸切	B	検出面	
	56	平安時代	須恵器	杯	胴部～底部	2/3	ナデ/ナデ/静止?糸切	C	検出面	





25



26



27



29



31



35



40



42



48



49



53



55

写真番号は、土器実測図（図20～22）の番号に対応する。

第IV章 まとめ

本調査では、古墳時代前期・後期、平安時代の遺構と遺物を確認した。主な遺構は住居跡、建物跡、井戸跡、性格不明遺構、溝跡、土坑である。住居跡は古墳時代前期1軒、後期2軒、平安時代1軒の4軒で、古墳時代前期の住居跡には壁際に炭化物が並んでいる。後期の住居跡の内1軒は全体を検出し、カマドと住居中央には如とみられる焼土面がある。平安時代住居跡は検出が一部であるが、この他に遺構の上面にカマドが潰れたものと考えられる焼土塊をA・B区で1ヶ所ずつ検出した。古墳時代の住居跡の上に位置し、これ以外の場所でも遺構覆土上の包含層から完形をはじめ土器が多く出土していることから、平安時代の遺構が調査区内に広く存在している可能性がある。性格不明遺構は古墳時代後期の溝状の遺構で、覆土下半から底面にかけて土器が多く、底面の中央には長軸（南北方向）に石が並べられている。また、B区よりも南西（C区）では、調査区は僅かな範囲であるが、遺構のない河川跡と想定される砂層を確認した。

古墳時代前期・後期、平安時代の集落のみの確認であるが、周辺の調査では、集落とともに弥生時代後期から古墳時代前期にかけての周溝墓群が各場所で造られており、古墳時代前期の住居跡は、この範囲の中に位置する同時期の住居跡である。また、古代では建物跡として礎盤石がある土坑、遺物では灰陶器のほか、破片で緑釉陶器と白磁が出土した。明確な遺構の検出等はないものの、周辺の調査においては片面視がみられるなど、官衛的な施設が存在が示唆されている地域であることから、こうした範囲の一端にあることがうかがわれる。

本調査区は、遺構掘り下げ時から水が湧きやすい場所であったが、これは周辺の調査ではあまり見られていない状況であり、本調査区での特徴とも言える。この様な状況に伴った水に関わる遺構として平安時代の井戸跡があるが、このほかにA-SX1とB-SD1も関係のある遺構である。A-SX1はレキ層を掘り込んだ溝状の遺構とみられるが、掘り下げの過程で水が湧き始め、底面では常に溜まっている状態であった。遺構の埋土については層位の下半から土器を含んでおり、長胴甕を中心に大型の須臾器甕や模倣杯などが意図的に置かれた可能性を指摘しておく。また、B-SD1は南北方向に長く延びる溝であり、土層の断面観察からは短期間で埋没したことが考えられ、埋土中からの遺物がない中で、完形のミニチュア土器1点が出土している。この2つの遺構に共通するのは、調査区内で検出面及び遺構の位置の様子が変化する場所にあることである。調査区内の状況は、A区東側は黄褐色土層で、中央付近ではレキ石を多く含む暗褐色土であるのに対して、これよりも西では中央部分と同じ土層ではあるがレキ石が入らなくなる。B区では東側はレキ石を含む赤褐色土、西側がレキ石を含まない明褐色土層となっており、それぞれの変化点にA-SX1とB-SD1が位置している。また、遺構については、平安時代の遺構はA区東側で検出した他に調査区全体に広がっている可能性があるが、古墳時代の遺構については、A-SX1・B-SD1の西側と位置が限定されている。

これまでに確認されている遺跡の状況から、本調査区の西側に隣接する調査区(26)では、遺構の検出は希薄であるが、古墳時代後期の住居跡とともに古墳時代前期の壺を伴った周溝墓の可能性のある遺構が検出されている。北側の桐原宮北遺跡(25)、東側の浅川扇状地遺跡郡県道高田若槻線地点(27)で確認されている様な遺構が集中した状況ではないものの、本調査区を含め、一連の集落域であることが考えられる。本調査としては、住居跡をはじめとした遺構の検出数からみても集落域の中心部からは外れた様相を呈するが、古墳時代後期と平安時代においては地形に沿って水との関係がうかがわれる遺構が造られた場所であることが示唆され、広く展開する集落域での土地利用の一端を示すものと想定される。

報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん きりはらまきのいせき さん		
書名	浅川扇状地遺跡群 桐原牧野遺跡（3）		
副書名	大規模通所介護（デイサービス）施設新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査		
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財		
シリーズ番号	第159集		
編著者名	遠藤恵実子		
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター		
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL：026-284-0004 FAX：026-284-0106		
発行年月日	2021（令和3）年3月31日		

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査起因
		市町村	遺跡番号					
桐原牧野遺跡	長野県長野市 桐原一丁目 764番1外	20201	A-501	36° 38′ 54″	138° 11′ 41″	2019.6.17 ～ 2019.8.22	645㎡	福祉 施設建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
桐原牧野遺跡	集落跡	古墳時代 前期		住居跡 1軒		土師器		
		古墳時代 後期		住居跡 2軒 性格不明遺構 1		土師器、須恵器		
		平安時代		住居跡 1軒 溝跡 1条 井戸跡 2基 建物跡 1棟 土坑		土師器、須恵器 灰軸陶器、白磁		
要約	古墳時代・平安時代の集落。住居跡は古墳時代前期と後期、平安時代の4軒、このほか建物跡を1棟と礎盤石がみられる土坑を検出した。古墳時代後期の性格不明遺構は、底面を中心に土器が置かれた可能性がある。 調査区内の検出面にみられる地山層の土質は場所によって異なり、遺構の位置にも影響している。全体に湧水が著しく、井戸が造られるなど、水と関わる特徴がみられる。							

長野市の埋蔵文化財 第159集

浅川扇状地遺跡群

桐原牧野遺跡（3）

令和3年3月31日 発行

発行 長野市教育委員会
編集 長野市埋蔵文化財センター
印刷 信毎書籍印刷株式会社